

【農林水産大臣賞】

- 1 受賞団体：石原自治区〔広島県三次市〕（会長 宮本 正和）

2 むらづくりの背景・動機

石原自治区は、総人口 182 人で、三次市の中心部から北に約 10km 離れた標高 200～330m の山間農業地域に位置。

昭和 55 年、地域の団結と集落の賑わいづくりのため、若者有志による「石原こぶし会」が設立。平成 12 年度から中山間地域等直接支払制度、平成 19 年度から多面的機能支払制度の活動を開始。

令和 4 年度には農村 RMO 事業に着手し、将来の石原集落についてのアンケートや小集落ごとの懇談会、地域の小学生とのワークショップを通じて、幅広い意見を集め、住民が一丸となれる「石原集落地域将来ビジョン」を策定。ビジョンは、「みんなでワッショイ！住みよい石原」をスローガンに、「くらしづくり」「ひとづくり」「しごとづくり」「かんきょうづくり」の 4 本柱に沿って目標や活動を定めたもので、住民全体で協力して戦略的に推進している。

3 むらづくりの内容

（1）生産面における取組状況

農業生産基盤整備を契機に、農業法人等を中心に水稻に加え、アスパラガス、もち麦等の栽培を開始。人手を要するアスパラガスの収穫作業には、社会参加が苦手な方、地区内の女性、熟年退職者など多様な人材が参加し、農業労働力確保と地域住民の生きがいに貢献している。

多面的機能支払制度を活用して、畦畔草刈り作業の軽減のため、センチピードグラスによる被覆の試行や、経験豊かな熟年世代を中心に住民が一体で鳥獣被害防止柵や捕獲用箱罟の設置・管理を実施し、営農環境の改善にも貢献している。

（2）生活改善の取組状況

多様な関係機関と連携・協力し、集落の小学生によるサツマイモや有機米の栽培・販売体験、市内外の住民を対象としたアスパラガスの収穫体験、近隣地域と連携して集落住民が一体となって準備・開催する「ひまわりまつり」、集落の子供たちと取り組む「ホタルの舞う里づくり」といった地域資源を活用した取組で住民間の交流を促進。幅広い世代間の交流を通じて、地域の一体感の醸成や、遠慮なくものが言える雰囲気づくり、住みやすく子育てしやすい環境づくりに貢献し、U・I ターンも実現している。

「石原ひまわり会」は“女性が動けば地域が変わる”をテーマに、遊休農地を共同で利用し、野菜の生産や出荷、加工品づくり、鳥獣害被害防止柵の設置に取り組み、楽しみながら耕作放棄地の活用に貢献している。

【農林水産大臣賞】

1 受賞団体：石^い畳^{しだたみ}地区〔愛媛^{あゐ}県^{けん}内子^{うちこ}町^{ちょう}〕（会長 寶^{ほう}泉^{せん} 武^{たけ}徳^{のり}）

2 むらづくりの背景・動機

石畳地区は、総人口 216 人で、内子町中心部から北西に約 12km 離れた、標高 200～350m の中間農業地域に位置。

昭和 62 年に 20～40 代の 12 名の有志が「石畳を思う会」を結成し、営利を求めるのではなく、将来世代への投資として活動を続けている。

平成 2 年にはメンバーが労力と資金を提供して水車小屋を復元し、水車祭りを開催。祭りは自治会とも連携し、毎年少しずつ規模を拡大している。

平成 14 年及び平成 24 年には、10 年後の地域を見据えた「石畳地域づくり計画書」を策定し、従来の保全活動を発展させた地域づくりの目標を設定。この計画を踏まえ、平成 21 年には「企業組合石畳むら」を、令和 2 年には「(株)石畳つなぐプロジェクト」を設立。

令和 7 年度から農村 RMO 事業を活用して新たな将来マップを作成し地域全体の発展を目指している。

3 むらづくりの内容

(1) 生産面における取組状況

栗の生産量が町内で最も多い石畳地区では、若手農家 7 人が栗のブランド化を目指し、農薬を使わずに樹上完熟栗を栽培し、厳しい選果で高品質な栗を生産している。さらにクラウドファンディングを活用した加工・販売により、地域の稼ぐ力を向上。

企業組合石畳むらは、土日に蕎麦屋を運営し、地元産の蕎麦を活用したメニューを提供。

(2) 生活改善の取組状況

石畳自治会、石畳を思う会、石畳つなぐプロジェクトの 3 つの組織が連携し、地域課題の解決に取り組んでいる。

石畳を思う会が景観・伝統文化保全活動を担当し、企業組合石畳むらと(株)石畳つなぐプロジェクトが観光や特産品のブランド化等事業活動に取り組み、これらに石畳自治会が連携して、むらづくりを進めている。自治会は各世帯からの会費に加え、町の交付金（材料費 8 割支給）を活用して運営。水車や屋根付橋等、源流域の里山景観を、できるだけ補助金に頼らない形で、地元住民の自発的参加により保全活動を行っている。

現在、水車祭りは地域住民 140 人がスタッフとして参加し、集落外から 800～1000 人が来場するイベントとして成長。このほか、地元の空き家を移築して「石畳の宿」を整備し、女性中心の運営で地元食材を中心とした料理を提供し、外国人観光客も受け入れている。

【農林水産大臣賞】

- 1 受賞団体：一般社団法人三原村集^{みはらむらしゅうらくかつどう}落活動センターやまびこ
〔高知県三原村〕（理事長 ^{みはらむら} 宮崎 ^{みやざき} 俊雄 ^{としお}）

2 むらづくりの背景・動機

三原村は、総人口 1,342 人で、四万十市、宿毛市、土佐清水市に囲まれた、標高 120m 前後の山間農業地域に位置。

高知県の中山間地域対策として集落活動センターの取組を進めるため、平成 25 年に準備会を立ち上げ。村全体を 1 つの集落と位置づけ「村民が主体となり地域の課題やニーズに応じ、生活・福祉・産業等様々な活動に取り組む仕組みづくり」を目指した。

平成 26 年に村全域をカバーする集落活動センターを設立し、村役場と分担・協働したむらづくり活動を開始した。福祉サービスを充実させた安心して生活できる村づくりと、生産活動の継続による農村の維持の二本立てで活動を進めている。

令和 4 年度からは農村 RMO 事業を活用して農用地保全や地域資源活用の強化に取り組んでいる。

3 むらづくりの内容

（1）生産面における取組状況

低農薬の特別栽培のブランド米「水源のしずく」を商品化し、厳しい基準を設けて販路拡大。新たに精米機を整備し生産量増加を目指している。

センターが開始したシシトウ栽培は、新たに農事組合法人三原やまびこを設立して栽培を継続し、7 年間で累計売上 1 億円を達成。中山間地域における農業振興のロールモデルとして注目を集めている。また、高齢者が自由な時間に働ける仕組みを導入し、福祉と雇用を両立。村内の高齢者の働く場、生きがいつくりの場としての役割を発揮している。

（2）生活改善の取組状況

センターの店舗部は、地元おかみさんによる地域食材を使用したランチを提供する村民憩いの場「やまびこカフェ」などの運営や、年 1 回のビアホール開催を行っている。

特産品販売促進部は、村内事業者の商品を預り販売イベントでの PR 等、村全体の特産品の販売促進に貢献している。

移住促進部は、移住者と村民の交流を目的にイベント（バーベキューなど）を開催し定住につなげている。令和 6 年度は移住者が 18 名と移住者の増加が顕著。そのうち県外からの移住者が 8 名を占めている。

福祉支援部は高齢者の健康づくり・生きがいつくりを目的に活動しており、24 時間営業のコインランドリーを設置・運営している。

このほか、令和 7 年度からはスローサイクリングツアーを開始し、その事業拡大に向けてガイドの育成にも取り組んでいる。